

女性が抱える

健康問題とその予防

第9話

中絶せざるを得ないことがある

日本家族計画協会が実施した「第8回男女の生活と意識に関する調査」(2016年)によれば、女性の10.4%が中絶を経験し、そのうち17.1%が中絶を繰り返していることが明らかとなりました。「最初の人工妊娠中絶を受けることを決めた理由」の第1位は、「経済的余裕がない」「相手と結婚していないので産めない」が24.3%で同率。「自分の仕事・学業を中断したくない」が8.6%と続きます。さらに、「最初の人工妊娠中絶を受ける時の気持ち」を聞くと、「胎児に対して申し訳ない気持ち」が58.6%、「人生において必要な選択である」と「自分を責める気持ち」がそれぞれ17.1%となっています(図)。

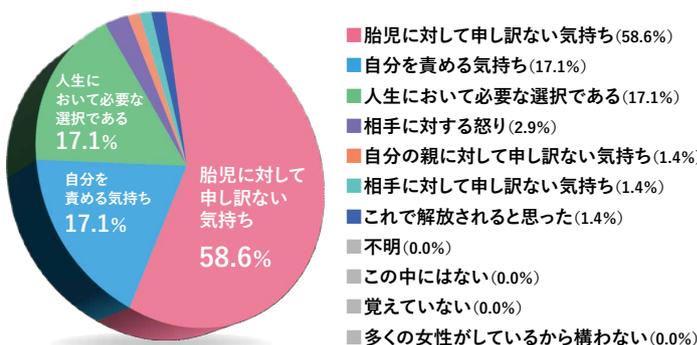
このような数字を羅列して、「あなただけではできないこと」をひたすら強調するつもりは毛頭ありません。でも、考えてみれば、100%確実な避妊法がこの世の中に存在しない限り、性行為を行えば誰にも妊娠の可能性があり、それが計画外であった、諸事情で妊娠を継続できない、その結果として妊娠を中断することはあり得ることなのです。僕としては、「人生において必要な選択である」の割合がもっとも増えてほしいと願っています。

以前、和歌山県高野山「奥の院」を訪れた時、数え切れないほどの水子地藏がまつられている場所を見つけた。老女や、時に若い女性が花を手向けている姿を間近にして、「もういいでしょう」と声をかけたくなる衝動に駆られました。そして、不思議なことに、そこには男性の姿がありません。妊娠は男女の営みの結果でありながら、女性がその責任を一手に引き受けてしまっているのです。供養することで少しでも心が癒されるのであれば、それを否定はしません。ただ、石はただの石でしかありませんし、今を精いっぱい生き続けることこそが供養になるのではないのでしょうか。

診療の間では中絶の相談を受けることがしばしばあります。そんな時、妊娠している女性の健康が維持されなければ胎児の正常な発育は保障されないこと、したがって、身体的、精神的、社会的、経済的に、妊娠の継続が困難な女性では、中絶を余儀なくされる場合もあることを話し、中絶をモラルとしてではなく、性と生殖に関する健康と権利の視点から捉えるようにと助言させていただいています。少子化時代に「家族計画」もないだろうと言う方が

図 最初の人工妊娠中絶を受ける時の気持ち(女性)

日本家族計画協会：「第8回男女の生活と意識に関する調査」(2016年)



[執筆者]
北村 邦夫

きたむら くに お
日本家族計画協会 会長

自治医科大学を1期生として卒業後、群馬県庁に在籍する傍ら、群馬大学医学部産科婦人科学教室で臨床を学ぶ。1988年から日本家族計画協会クリニック所長。東京都予防医学協会理事、日本母性衛生学会常務理事。2018年より現職。